

## 巻頭言

## 未来に向かって挑戦する

鈴木 亮 一\*



“Challenge for our future”

金沢工業大学の扇が丘キャンパスのある施設の入口に記されている言葉です。金沢工業大学は、未来の新技术や新たな価値を創造する拠点として、2017年7月に「Challenge Lab」を開設しました。木質のフローリングと落ち着いた照明が、アカデミックな雰囲気を醸し出しています。

この「Challenge Lab」は、学部学科の枠を超えて学生と教職員が多様な学際的なチームを構成し、私たちの明るい未来を創るために解決すべき問題に対して、失敗を恐れずに挑戦することができる場です。また、世代・分野・文化を超えて人々をつなぎ、キャンパス内の教育研究施設や環境を有機的に結合する役割も担っています。

さて、技術の進歩はますます加速しており、次から次へと新しいイノベーションが起こっています。今から10年前の2009年を振り返ってみますと、その年の流行語大賞は「政権交代」であり、政治の面において一つの転換期にありました。技術の面では、2008年にタッチディスプレイ式のiPhoneが国内発売され、従来の携帯電話の形態が見直された年だったのではないかと思います。今では、このタッチ型のディスプレイが主流になっておりますが、当時はボタン式に比べ反応が悪く、充実した機能もなく使い勝手が悪いと言われていました。今では、折り畳みできるボタン式携帯電話を目にすることはほとんどありません。

スマートフォンが広く使われるようになり、新たな産業やエコシステムが生まれ、われわれの暮らしも大きく変わりました。そして、IoT、AI、5G、量子コンピュータ、ブロックチェーン等々の技術により、更に発展していこうと容易に予測できます。

このような変革の激しい時代に、高等教育機関としての大学は、学生たちに何を教育し、どのような

人材を輩出すればよいのか大いに迷います。大学で学んだ最先端の知識や技術も、10年後には古くなり、20年後には不要なものになってしまうこともあるからです。

学生たちには大学において、新たな発見をする過程、そこから生まれる新しい知見を体系づけたり形にしたりする過程を学んでほしいと思っています。何事もそうですが、新しいモノを生み出すときや、新しいコトを起こすときには、大きな苦しみや挫折も経験します。このような学びの体験から、

- ・ことの本質を捉える力
- ・未来を思索する力
- ・いつの時代にも適応できる柔軟な思考力
- ・解のわからない問題に果敢に挑戦する力

を涵養し、これらの力を発揮するための知識やスキルを修得した人材を輩出することを大学は目指しています。このような理由から、「Challenge Lab」内のクラスター研究室（学部を超えて運用される卒業研究）では、Speculation → Design → Realization → Innovationという過程を意識し、問題発見と問題解決に取り組んでいます。

10年、20年、30年後の世の中を思索することができ、直面する問題に対して本質を捉え、果敢に挑戦する力は、いつの時代にも求められる普遍のものと考えます。また、大きな壁に直面したときにも、それを乗り越えるための原動力となり、そこから想像もできなかったようなイノベーションを生み出す力にもなるでしょう。

新しい年号がはじまる2019年、あらたな気持ちで、これからの社会や暮らしに求められる技術や価値の創造に自身がどのように貢献できるかを考え、未来に向かって挑戦する心をもち果敢に進んでいくことが大切ではないかと思えます。

\*金沢工業大学工学部 ロボティクス学科 教授